Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol.28
2010

ヒバクシャ医療国際協力通信

CONTENTS

■第8回永井隆平和記念・長崎賞授賞式
■韓国医師等へ被爆者医療研修を実施
■ブラジルからの被爆者医療研修生紹介
■平成の鳴滝塾（小中学校への出前講座を募集）

▲ NASHIMの蒔本会長から賞状（楯）を授与されるクリストフ・ライナー教授（ドイツ ビュルツブルグ大学病院長）

第8回永井隆平和記念・長崎賞 クリストフ・ライナー教授に授与

永井隆平和記念・長崎賞は、原子爆弾による被爆者と放射線被曝事故による被災者に対する治療及び調査・研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じ世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人や団体に贈られます。

NASHIM事業の一環として1995年に創設されて以来、第８回目となる永井隆平和記念・長崎賞授賞式が３月15日に長崎市において開催され、ドイツから出席された受賞者クリストフ・ライナー教授に蒔本会長から賞状と賞牌（ブロンズ像「生命のともしび」）、副賞の賞金が授与されました。

昨年９月永井隆平和記念・長崎賞選考委員会、同12月に永井隆平和記念・長崎賞委員会が開催され、本賞にふさわしい方を選考するために活発な議論が交わされました。クリストフ・ライナー教授は、ドイツで最も古い大学のひとつであるビュルツブルグ大学医学部を卒業後、一貫して核医学を専攻し、放射線の医療応用、特にアイソトープ（放射性同位元素）を用いた診断と治療に貢献してこられ、ベラルーシ共和国で甲状腺疾患診断のための三次元超音波診断法を確立し、甲状腺がんの早期診断と再発診断に大きく貢献し、放射線誘発甲状腺がんの臨床治療に関する多くの学術業績を上げられました。また、1992年からは、最も被害が甚大なベラルーシ共和国で再発転移を繰り返す247名の重症小児甲状腺がん患者をドイツに招き、子供たちへの医療支援を行い大きな成果を上げ、ベラルーシ大統領からフランシスカ・スカリナ勲章を授与されるなどの多岐にわたる貢献が評価され、今回の受賞となりました。

授賞式へは、長崎県知事、長崎市長をはじめ、大学、病院、研究施設などから多数の関係者の皆さんにご出席いただきました。また、ライナー教授が、受賞スピーチを行い、「チェルノブイリ事故後の日本政府や支援団体、研究者の皆さんのこれまでの協力に感謝し、今後も事故後に増加した甲状腺がんの治療に力を注ぎたい」と力強く述べられました。

授賞式後は祝賀会を開き、ライナー教授の受賞を皆さんに祝っていただきました。

ライナー教授との思い出話を披露する長瀧先生

長崎原爆病院の朝長院長と懇談

放射線影響協会の青木理事長と懇談

受賞者紹介

1．氏名・年齢

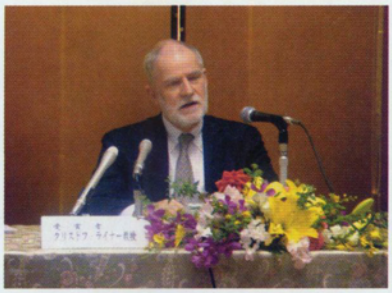
クリストフ　ライナー
Christoph Reiners（64歳　ドイツ連邦共和国）

2．主な経歴

- 1971年　ビュルツブルグ大学医学部卒業
- 1971年～87年　ビュルツブルグ大学で核医学を専攻
- 1987年～89年　エッセン大学准教授
- 1989年～94年　エッセン大学核医学教室主任教授
- 1994年～現在　ビュルツブルグ大学核医学教室主任教授
- 2001年～現在　ビュルツブルグ大学病院長

3．主な活動

- 1989年　オーストリア医療放射線防護協会名誉会員
- 1990年～96年　ドイツ医療放射線防護協会会長
- 1996年　ドイツ連邦共和国、連邦十字勲章
- 1996年～98年　ドイツ放射線防護委員会会長
- 2000年　ベラルーシ共和国、フランシスカ・スカリナ勲章
- 2002年　レオポルド科学アカデミー会員
- 2003年　ミンスク市、ベラルーシ医科大学名誉博士
- 2005年～現在　WHO-REMPAN（緊急被ばく医療国際ネットワーク）ドイツ研究協力センター長
- 2010年　ニューヨーク市、スローン・ケタリング記念癌センター「生命の灯」名誉賞



第8回永井隆平和記念・長崎賞を受賞して

第８回永井隆平和記念・長崎賞の受賞者に選ばれたことを非常に光栄に存じます。原爆や放射線被曝の影響を受けた人々の福利向上を目的とし、世界平和実現に貢献する賞をいただいたことに対して深く感謝しております。

私は、放射線防護と放射線疾患の医学的管理を専門としていますが、最も印象深いことはチェルノブイリ原発事故により異常発生した小児甲状腺がんの治療に携わったことです。当時、ベラルーシ共和国ではこうした進行がんを治療するほどの医療技術が進んでいませんでした。それで、私たちは子供たちへの医療支援を始めるとともに、ベラルーシの医師へのトレーニングと教育を目的とするプロジェクトを立ち上げ、247名の子供たちをドイツに招きました。それから17年が経過した現在、その全員が治療に良く反応し、今や若き成人となり、既に自分たちの家庭を築くまでになっていることは、ほんとに嬉しいことです。チェルノブイリ原子炉の事故から20年以上が経過したにもかかわらず、国際協力は続いており、特に日本との協力はさらに進展しています。また、ビュルツブルグ大学と長崎大学は学術協定を結んでおり、今後も両大学が友好な関係を続け、世界平和実現に向けて努力していきたいと思います。

受入研修事業
（2月）

韓国医師等へ被爆者医療研修を実施

韓国に居住している被爆者への医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わる４名の関係者を招いて、受入研修を実施しました。研修者は２月21日に来崎し、事務職２名は２月25日まで、医療職２名は２月27日まで長崎に滞在して、長崎原爆病院をはじめとする医療機関や長崎大学などの研究機関等で被爆者医療に関する知識の習得や情報交換を行うとともに、原爆資料館などを訪れ被爆の実相についても学びました。

研修後の感想

ソウル赤十字病院　家庭医学医　安　玟垣（アン・ミンウォン）

原爆資料館見学では原爆による被害状況を、原爆関連医療機関訪問では被爆医療やその研究に関する専門的なお話しを聞くことができるなど、研修期間及び内容構成が、原爆についての理解を深める上で適切であったと思います。

今回の研修は原爆被害の深刻さをあらためて考える契機になったと同時に、自らの知識不足を痛感する機会でもありました。戦争・原爆を経験したことのない若い世代の多くが、同じような状況ではないかと思います。今後、原爆問題に対する理解を得るためにも、原爆の悲惨さや被爆医療について積極的な広報が必要だと考えます。

大邱（テグ）報勲病院　放射線科医　趙　顕澈（チョ・ヒョンチョル）

今回私が受講した７日間の研修プログラムは、内容が体系的に構成されており、原爆被害の深刻さと被ばく医療に対する理解を大いに深めることができたと感じています。私の専門分野が放射線科であることから、特にＰＥＴについてのお話しは大変興味深いものでした。また、被爆については医学的研究がいくつも行われていることを知り、その中心機関である放射線影響研究所にも関心を持ちました。残念ながら今回の研修では訪問することができませんでしたが、次回以降の研修プログラムで放射線影響研究所を訪問したいと感じています。

帰国後は、原子爆弾及びチェルノブイリ原発事故等による放射能被害の深刻さと、被爆者医療に係る知識の周知に努めたいと思います。

陜川(ハプチョン)原爆被害者福祉会館　総務担当　李　美淑(イ・ミスク)

研修１日目の行政オリエンテーションでは、どのような手順で被爆者健康手帳の交付が行われているか、在外被爆者の健康維持のためどのような事業に取り組んでいるかといった基礎的知識を得ることができました。また、研修２日目以降は、実際に被爆医療に携わっている先生方から原爆に関する医療的研究についてお話しを聞くこともでき、被爆医療の実情に対する理解が深まりました。

さらに、私自身が陜川原爆被害者福祉会館に勤めていることもあり、研修３日目の恵の丘原爆ホーム見学は非常に興味深く、長崎にある他の療養ホームも訪問してみたいと感じました。

今回の研修全体を通して、原爆の被害によりどれほどたくさんの方々が苦しめられたのかを知り、二度とこの地球上に戦争の被害者が生まれないようにという思いです。

帰国後は、被爆者の方々が過去の痛みを少しでも忘れられるよう、より一層業務に従事したいと思います。

意義ある研修に参加させていただき、ありがとうございました。

馬山医療院　院務課長　崔　寅吉(チェ・インギル)

今回の研修は、原爆被害の深刻さと被爆医療の難しさを理解するうえで非常に有意義であったと思います。特に、原爆資料館や恵の丘原爆ホーム見学では、実際に原爆を経験された方から実体験を踏まえた説明を聞くことができ、原爆被害の深刻さを改めて感じました。また、お話ししてくださった被爆者の方が戦争・原爆の悲惨さを後世に伝えようという情熱を持っておられたことが非常に印象に残っています。

私にとってこの５日間は大変実り多いものでしたが、今回研修でお世話になった長崎大学病院、日赤長崎原爆病院以外にもいくつかの先進病院を見学することができれば、さらに充実した研修になるのではないかと思います。また、研修中一部日本語で提供される資料がありましたが、これについてもハングル語で訳していただければ非常に嬉しく思います。

最後に、研修生が少数だったにも関わらず、お時間をさいて歓迎の場を設けてくださったＮＡＳＨＩＭ会長様、大学病院、原爆病院の先生方、行政の皆様に感謝申し上げます。また、過密なスケジュールの中でも、常に笑顔で親切に対応してくださった職員と通訳の方にも深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

ブラジルからの研修生紹介

ナシムの構成機関である、長崎大学病院及び長崎原爆病院等で２月22日から約１ヶ月間研修を受けているブラジルからの研修生を紹介します。

この研修事業は、厚生労働省から長崎県に委託された在外被爆者支援事業の一環として行われているもので、海外の医師を招聘し、日本の原爆医療等に関する研修を実施しており、今年度も日伯友好病院とサンタクルス病院から医師を受け入れました。

最初の１週間は韓国からの研修生と同様、被爆の実相を学ぶ研修を受け、残りの３週間はそれぞれ専門の研修を受けました。

原爆資料館で平和案内人から説明を受ける研修生

研修後の感想

ブラジル　日伯友好病院
ルシア　ミチコ　ヨシタ(Lucia Mitiko Yoshita)医師　専門:放射線科

まず、この研修の機会を与えてくださったＮＡＳＨＩＭ、長崎県、長崎大学と原爆病院の先生方に感謝申し上げたいと思います。

この研修を通して、私の専門分野における最新コンセプトと新しい診断方法について学ぶことができました。何よりも、原爆の影響に関して分子レベルから被爆者の精神健康面まで、幅広い研究内容を学ばせていただいたことは大変意義深いと感じています。

また、ここ数週間、日本の文化や習慣、そして歴史についても少し分かるようになりました。特に、長崎の歴史について多く学ぶことができました。私は日本の孫娘であり、そのことに大変感謝しております。ブラジルに帰っても日本の文化を大事にしたいと思います。

私の専門分野においても、また個人的な面においても本当に役立つ研修になりました。より良い診断が出来るだろうという確信を持って、国に帰ります。本当に有難うございました。

長崎大学医学部・良順会館の見学

長崎大学病院・河野院長を表敬

ブラジル　サンタクルス病院
ルーベンス ヤスゾー イッコー ウエダ(Rubens Yassuzo Ykko Ueda)医師　専門:外科

第二次世界大戦時に投下された原爆に関する知識を広めるための取り組みに、私も一員として加えていただいたことをとても光栄に思っております。研修が始まった頃は、原爆に関して僅かな知識しか持っていませんでしたが、研修を通して多くのことを学ぶことができました。原爆によってもたらされた長崎市民、県民の苦悩の日々は、私の心にいつまでも残るでしょう。

永井隆先生をはじめ、苦難の中でも助け合いながら、長崎を再建していく人々の強さは大変印象深かったです。特に、長崎大学は放射線の影響に関して、世界的な技術と研究実績及び治療方法を開発してきました。こうした大学で分子生物学、遺伝子学的研究、病理学、核医学、放射線学、内視鏡による手術などを学ぶことができ、大変嬉しく思っております。このことに対する感謝の気持ちを一言で表すと「すごい！！」ということです。この研修の機会を与えてくださったＮＡＳＨＩＭと長崎県、長崎市また被爆者や医学的研究についてだけでなく、日本の歴史や文化、生活面も学ぶことができるよう配慮してくださった山下先生、大津留先生、熊谷先生、そのほか長崎大学の先生方や長崎原爆病院の先生方に感謝申し上げます。

この美しい町でこのような時間を過ごすことができ、非常に嬉しく思います。

そして、この研修から学んだ最も大切なことは、「戦争も核兵器ももうやめよう、平和な世界を作ろう」これが、私の国、ブラジルの人々に伝えたいメッセージです。

平成の鳴滝塾（小中学校への出前講座を募集）

ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及するため、長崎大学の先生方に小中学校へ出向いていただいて講義を行う出前講座を実施しています。平和と科学・医療に関する国際協力への興味・関心を促すことのできる楽しい講座です。

下記の幅広いメニューを小中学生の皆さんにわかりやすく説明しますので、興味をお持ちでしたらぜひ事務局までご連絡ください。

島原市立第一中学校

長崎市立滑石小学校

番号	タイトル	
1	身近な放射線の話（自然放射線、放射線発見の歴史と応用）	
2	チェルノブイリにおける国際被ばく者医療協力	世界最大の原子力発電所事故被災者への医療協力
		ベラルーシ人から見たチェルノブイリと長崎
		テレメディスンによる遠隔医療協力
3	カザフスタンにおける国際被ばく者医療協力	世界最大の核実験場セミパラチンスク（カザフスタン）と長崎
		カザフスタン人から見たセミパラチンスクと長崎
4	世界の被ばく事故と国際被ばく者医療協力	世界の被ばく事故について
		もし、被ばく事故が起こったら
		放射線障害を治療する最新医療（再生・移植医療について）
5	長崎原爆の話	原爆直後の救護活動と調査
		長崎原爆被爆者のこころの調査
6	在南米・在韓国被爆者	海を渡った被爆者
7	世界保健機関WHO からみた長崎の国際被ばく者医療協力	
8	放射線・紫外線とわたしたちの健康	

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第28号
発行／平成22年3月30日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内）
TEL 095(895)2475　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/